総合政策　第14巻第１号（2012）pp.55-65
Journal of Policy Studies

〔調査報告〕

パラグアイにおける伊藤勇雄一族（1）
── イグアス移住地での生活と意識 ──

三須田　善暢*

キーワード　移住、伊藤勇雄、パラグアイ、日系人社会

1　はじめに
1．1　調査の経緯と問題意識

本稿は2011年8月20日（土）から27日（土）にかけて南米パラグアイ・イグアス日系人移住地を訪問・調査した際の調査報告である。

筆者はここ数年、岩手・旧川崎村出身の農家で県内および海外の開拓に尽力した伊藤勇雄氏（いとういさお、1898（明治31）-75（昭和50）年。以下敬称略。写真１）の研究をおこなっている。伊藤が最後に開拓の地としたのがパラグアイ・イグアス移住地であった。2011年はイグアス移住地の50周年にあたり、式典が開催された。この機会に、式典に参加するとともに、伊藤勇雄研究の一環としてイグアスにいる伊藤一族関係者への聞き取りを試みたのである。

さて、伊藤勇雄とは誰か。なぜ勇雄に着目するのか。三須田（2011）で記したように、勇雄とは、運動家、宗教家、政治家、詩人、農地開拓の実践家といった多様な活動をした人物であるが、「求道者」かつ「ロマンチスト」というキーワードでまとめることができるだろう。彼は、大正デモクラシーのなかで「新しき村」や農民運動・社会主義運動にかかわり、キリスト教の洗礼を受けつつも煩悶をかさね、最終的に「人間宗教」というあらゆる宗教の枠を超えたという独自の思想をつくりだした。ホイットマンに影響を受けた詩人でもあり数冊の詩集を残している。また、村議・県議（社会党）をつとめつつ、県内（煙山、外山など）の開拓に従事し、晩年にはパラグアイの開拓に従事した。その一生についてはすでに伝記的著作（大久保1984, 1995）や、NHKのドキュメンタリー番組などによって明らかにされている（その活字化は、相田(2003)）。

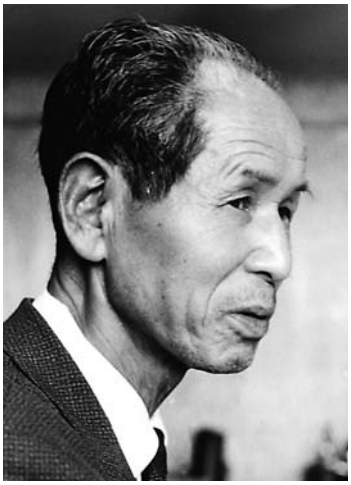


写真１　伊藤勇雄（伊藤勇雄顕彰会所蔵）

こうした興味深い人物であるにもかかわらず、いまだその学問的、特に思想史的研究は充分にされているとはいいがたい。また、パラグアイで勇雄の理念はどう受け継がれたのか、すなわち、家族・子孫に与えたであろう顕在的・潜在的影響も定かではない。後者については相田（2003）の取材から相当のことがうかがえるが、実際に聞き取りをしてみると当然ながら別の側面もある。

くわえて、こうした「伊藤勇雄研究」という文脈を離れても、細谷によるブラジル日系人移住地訪問記録での問題意識と同様の課題（細谷 2002：2）が、すなわち、端的に日系人移住地についての現状がいまだ充分には知られていないという課題もある。

こうした問題意識をもとに、筆者は、ひとつは

＊　岩手県立大学盛岡短期大学部　〒020-0193　岩手県岩手郡滝沢村滝沢字巣子152-52

今後の伊藤勇雄研究に資するため、いまひとつは日系社会の文化変容の考察に資するために、聞き取り調査の一部を記すことにした。まず本稿では、前提となるパラグアイおよびイグアス移住地の概況を述べ、別稿において一族の記録を載せる。なお、現存の人物については原則として匿名で記述している。

1. 2　パラグアイの概況と日本人移民の歴史・現状

【パラグアイの概況】

パラグアイ共和国はブラジル、ボリビア、アルゼンチンと国境を接し、人口は現在約620万人で、国民の90%以上が原住民のグアラニー人（いわゆる「インディオ」）およびグアラニー人とスペイン人の混血（メスティーソ）である。その他、日本、韓国、ドイツ、ブラジル、アルゼンチンなどからの移民がいる。スペイン語とグアラニー語が公用語である。

国土面積は40万㎢（日本の1.1倍）、農牧林業の生産と生産品の輸出に依存しており、大豆及び食肉生産の比率が高い。経済成長率は5.8%（2008年）で、成長傾向が続いている。もっとも、2009 年は干ばつによる不作などによりマイナス3.8%になってはいる。

このように経済は安定推移といえようが、経済的な不平等は激しく、「人口の半数以上が貧困層で、そのうちのおよそ25パーセントは1日1ドル以下で暮らす絶対的貧困層に属し、その多くが農村部で生活してい」[1] る。

農業構造をみると、農業経営体全体の83.5%を占める約24万2千戸の小農が、農地面積の4.1%を保有しており、大農は全体の2.6%の約7千戸であるが、農地の85.5%を保有するという構造になっている（図表1）[2]。

1954年にアルフレド・ストロエスネル（Alfredo Stroessner、1912-2006年）の軍事独裁政権が誕生し、以後1989年までそれが続いた。この政権下、日本との関係は緊密になり、日本が積極的な援助をおこなったこともあってストロエスネル大統領は親日家となり、1959年に日本との移住協定を調印して日本人移民に便宜をはかることになった。

【日本人移民の歴史・現状】[3]

1936年のラ・コルメナ地区への入植をもって、パラグアイ日本人移住の嚆矢とする。1930年代にブラジルへの移民が制限されたことにより、パラグアイへの移民が進められたのである。しかし戦前はあまり進展せず、厳しい環境から離農しアルゼンチンやブラジルへ転住する者も多かった。戦後1950年代になって日本人移民は徐々に増加し、30年間に8万5千人を受け入れることを約束した日パ移住協定以後は、日本政府の全面的支援のもと多くの移住地が建設されていく。しかし、ブラジル国境にそったイタプア県、アルトパラナ県の移住地は鬱蒼たる原生林地帯であり、全面的支援とはいえいまだ厳しい開拓生活であった。現在までの移住地は以下のとおりである――ラ・コルメナ移住地、チャベス移住地、ラパス移住地、ピラポ移住地、イグアス移住地。その他エステ市、エンカルナシオン市、アスンシオン市、ポドロファンカバリェロ市にも日系人社会がある。

その後、日本の高度成長期とかさなったことも

図表1　パラグアイにおける農業経営体数、農地面積（2008年）

区分	経営体数(A)	割合(%)	農地面積(ha)(B)	割合(%)	平均農地面積(ha)(B/A)
小農	241956	83.5	1340096	4.1	5.5
中農	40232	13.9	3379764	10.4	84
大農	7478	2.6	27807215	85.5	3718.5
計	295666	100.0	32527075	100.0	112.3

注：ここでは小農は所有面積20ha未満、中農は20以上500ha未満、大農は500ha以上として算出。
資料：2008パラグアイ共和国農牧省センサス暫定値（注2より引用）

あり、経済的理由による移住者は激減し、営農に期待をもてない移住者はアルゼンチンかブラジル、パラグアイの都市部に転住していった。

だが、1970年代は南米が経済成長を遂げた時期でもあり、1974年に国際協力事業団（JICA、現国際協力機構）が発足して、日本からの経済・技術協力が進み移住地でもインフラ整備がなされていく。日系移住地は行政区としては「市」に昇格し、1978年にラ・コルメナで、1981年にイグアスで日系市長が誕生するなど政治的にも認められていく時代となる。なお、1973年で移住船での移住は停止され、その後の移民は航空機によるものとなった。

しかし、1980年代から南米経済は停滞、大きく失速した。それとは逆に日本はいわゆる「バブル経済」に入り、日本への出稼ぎが始まっていく。こうしたなか、日系移住地では大豆の不耕起栽培が導入されて拡大する。日本へも非遺伝子組み換え大豆が輸出されるようになり移住農民の経済的安定に大きく寄与することになった。

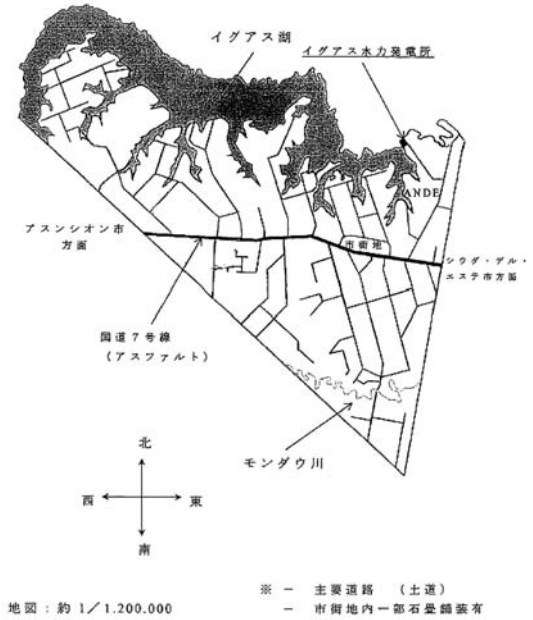
パラグアイ経済が悪化の一途をたどるなか、1989年にストロエスネル政権が崩壊、各地の治安が悪化した。上述した経済的な不平等もくわわり、日系移住地でもグアラニーの土地なし農民による不法占拠事件が発生した。この問題は、現在にいたるまで時折発生しており（2008年にも起きている）、グアラニー人と移住者との間にある緊張関係を示している。

「バブル経済」崩壊以降は、日本への出稼ぎは減少するものの、人口減少と高齢化が進み移住地の空洞化が進行する。また、開発一辺倒の時代は終わり、環境保護の意識が高まっていく。1990年代後半から2000年代以降は、このような日本と同様の課題にくわえ、非日系社会との緊張関係という「豊かではあるが困難な課題に直面」していくのである。

現在のパラグアイにおける日本からの移住者は約7000人で、人口比率でわずか0.1%ほどである。しかし、その農業分野での貢献は大きく、パラグアイではほとんど食べられていなかった野菜を栽培し普及させたことや、大豆生産での不耕起栽培の導入は特筆に値する。

今回の訪問で各移住地の日系人老若男女数名と話した際、その全員がパラグアイで骨をうずめると述べ「ふるさとはここだ」と話してくれた。いまだ日本の国籍を保持している者がいるにもかかわらず、こうした意識を持つのは興味深い。

図表２　イグアス市街地



資料：澤村編（2008）

1．3　イグアス移住地概観[4)]

【位置と経緯】

イグアス移住地は、正確にはアルトパラナ県イグアス市という。首都アスンシオン市から286 km、ブラジル国境の都市シウダー・デル・エステ市（以下エステと略）から41 kmのところに位置し、両都市間を走る国道７号線沿いにある。平均標高は250 m、総面積は８万7762ha（うち約１万7200haは湖に水没）で、そのほとんどは農牧地である（図表２に市街地を載せておく）。

国策会社である海外移住振興株式会社（JICAの前身）が、日パ移住協定にもとづき、アルトパ

ラナ県の9万haほどの原生林の土地を購入し、日本人入植地を建設したのがイグアス移住地である。1961年の8月にフラム移住地（現在のラパス移住地）およびチャベス移住地から転住した14家族が最初の移住者である。当時のフラム移住地およびチャベス移住地は、既に満植状態となり、次男や三男を中心に新たな土地が求められていたのである。その後、日本国内からも移住が進み、伊藤勇雄も1968年に移住した。

2011年現在のイグアス市は日本人・日系人は約220世帯750名（うち1世：45%、2世：50%、3世：5%）で、非日系人は1676世帯8300名程度である。2001年のデータでは日本人・日系人による土地所有の面積は、2万4227haであり移住地全体の約28%となっている[5)]。

【自治活動の展開と「イグアス日本人会」】

移住地での生活、特に自治活動はどのように展開していったのであろうか。1964年から65年にかけて、生活上の必要からイグアス移住地に道路・教育・治安の各委員会が設立された。こうした委員会活動を基盤に、66年9月「イグアス移住地運営協議会」が開催され、67年12月には「イグアス自治会」が発足した。教育・治安・道路・文化・営農促進などの委員会が設けられ、移住者たちによる自治が本格的に開始されたのである。これがその後1978年に「イグアス日本人会」となり、80年に社団法人となった。1992年にJICAイグアス事業所が閉鎖されて以降、日本人会の役割は一層重要なものとなっている。

図表3　イグアス在住日本人・日系人の出身地別世帯数（2011年2月）

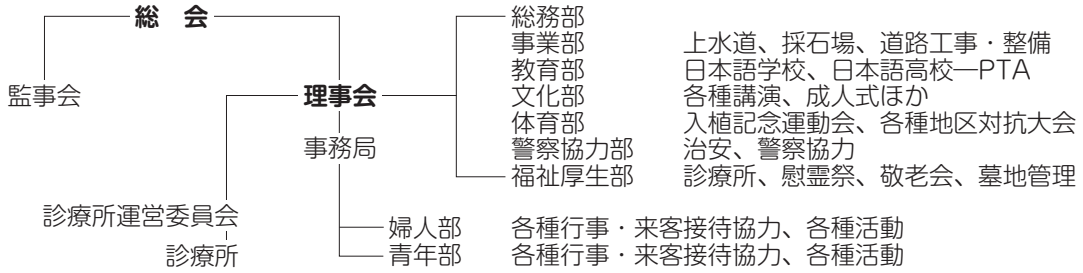
出身地	世帯数	出身地	世帯数
高知	24	群馬	2
岩手	21	山梨	2
北海道	20	神奈川	2
秋田	8	愛知	2
愛媛	7	佐賀	2
広島	6	香川	2
福島	6	奈良	2
鹿児島	5	山口	1
熊本	5	三重	1
山形	5	沖縄	1
鳥取	5	長野	1
東京	4	和歌山	1
静岡	3	新潟	1
富山	3	島根	1
長崎	3	千葉	1
大阪	3	岐阜	1
福岡	3	大分	1
徳島	3	茨城	1
兵庫	3	パラグアイ	89
宮城	3	ブラジル	5
宮崎	2	ドミニカ	1
青森	2	合計	265
岡山	2		

資料：澤村編（2011）

イグアス日本人会の会員数は、2011年3月現在、個人会員191名、賛助会3団体、賛助会員4名となっている。日本人会へは、後述する地区長が紹介することで加入できる。会には理事会があり、総会選出理事が3名、地区（いわゆる日本の「部落」）選出理事が4名の7名の理事で構成され、理事の互選で会長が選出されていて、後述するD氏が現会長である。職員は6名である。日本人会の会費は以下のようになっている（2011年度）。基本負担額は、1会員年間44万グアラニー（1円は約51グアラニー、1グアラニーは0.02円。以下Gsと記す）。土地所有面積による負担額は、農耕地1haにつき年間3400Gs、市街地1区につき年間7万4000Gs、第2市街地1区につき年間3万7500Gs。さらに治安分担金として1会員年間12万Gs、それに会費総額の30%を加算した額を負担する。

移住地の出身者をみると、高知と岩手が多い（図表3）。もっとも、多いといっても1割にもみたない数である。ただし、毎年移住地でおこなわれ、筆者も見学したEXPOでは岩手県人会ブースをだすなど、そのまとまりは強い（岩手以外では県人会ブースはなかったようである）。後述するB氏いわく、「（岩手出身者は）ずば抜けた人も、底辺にいる人もいる。しかし高知県出身者のようにバラバラにはなってはいない。また、何かの競争時には、1位ではないにせよ、だいたい2位から10位くらいに岩手人の多くが入る」。大豆の品評

図表４　イグアス日本人会組織図



資料：澤村編（2011）

会でも、岩手出身のＢ氏が２位であった。

移住地にも日本の村落同様「部落」がある。正式には「地区」だが、「部落」と呼ぶ人も多い。移住地は４つ（分け方では５つ）の地区に分けられる。４つの地区からは代表が出て日本人会の理事となる。また、地区長以下の委員も選出され（任期２年）、地区内の運営自治をおこなう。地区名は、協和（東南部／市街地隣接）、東栄（東部）、グロリア（中央市街地）、美隆（西部）。ただし、少し前までピクポという地区があった。またグロリアを東と西に分ける場合もあり、ピクポはグロリア西と美隆へ分割して合併された。現在の戸数は、協和（約 20 戸）、東栄（約 20 戸）、グロリア（約 80 戸）、美隆（27 戸）である。

地区ごとに祭りがある。地区に公民館のような施設は特にはなく、美隆に小さいものがあるがそれほど活用されてはいない。なお、移住地全体の盆踊りもあり、若者中心でおこなっている。また、日本のような消防団組織はない（ボランティアの組織はあるがあまり役にたっていない）。

日本人会の組織を図表にしておく（図表４）。

【日本人会の具体的な活動】

イグアス日本人会の活動・業務は以下のようなものである。大使館関係業務、居住証明他書類作成・翻訳、郵便物取扱、新聞購読取扱、電気・水道料金などの窓口事務取扱。こうした事務にくわえて、以下の施設等を所持・管理運営している――イグアス日本語学校、イグアス「匠」センター、聖霊幼稚園、イグアス診療所（当初は JICA の運営であった）、水道タンク、採石場、ピクボ公園、イグアス育苗センター。

これらの運営費は、採石場の収入により 90%、会費により 10% がまかなわれている。採石場の収入が大きな比重をしめている。

採石場では 40 年くらい前から採石をしている。ここは、分譲当初石が多く不便なところだったため、日本人会が採石場を運営することになった。現在はダイナマイト破砕で露天掘りをしており、現地人の人夫 10 名程度が、採石、選別、運搬などで働いている。管理は日本人・日系人である。現在、イグアスで水力発電ダムを建設中であり、それに石材を利用している。

さて、上述したように会費のなかから警察協力部（委員会）を通して治安の強化のため、具体的にはパトロール車の購入、人夫の雇傭、警察官の給料の増額などに使っている。「日本人会が中心になって警察協力委員会を組織して治安分担金を集め、警察車両のガソリン代、警官の居住費、給与補填、まかない婦の給与などを負担している。今年５月、同移住地の警察署に国から初めて配車されるまで、ずっとパトカーも寄贈し続けてきた」[6)]。こうした事情により、他地区に比べてイグアスは治安が良いといわれている。

しかし現実には必ずしも治安は良くはない。牛が盗まれることも多々あり、予防策としてＡ家では、家の入り口の少し前にゲートを設置しそこに管理人を雇って住まわせ、不審車両の監視をさせている。また、お金を持っているそぶりを、現地の人に対してはみせないことが大事だともいわ

図表５　日本語学校の児童・生徒数（2011 年２月）

単位：人

	小学部	中学部	小中計	高等部
男子	42	15	57	16
女子	33	21	54	6
計	75	36	111	22
うち非日語	37	14	51	3

注：非日語とは、家庭内で日本語を使用しない児童・生徒。
資料：澤村編（2011）

れている。A 家では人夫への給料も家には置かず、支払いのたびごとに農協（イグアス農業協同組合）から下ろすようにしている。とにかく「お金は手元にない」と人夫にいっておかねば危険であると、A 氏夫人は述べる。なお、農協や大きな企業では銃を所持した警備員を雇っている。

こうした背景には、前節で述べたような現地人[7]との経済格差が存している。「1989 年のクーデターによりストロエスネル大統領の独裁政権が崩壊すると、クーデターの指導者であったロドリゲス大統領による農地改革を期待した土地なし農民達によるデモ活動がさかんになり、イグアス移住地においても各地区を合計して 665 人の不法占拠者が侵入するに至りました。この問題の処理のため、日本人会では不法占拠処理対策委員会を設置し、各方面に働きかけた結果、11ヵ月を経てようやく裁判所の立ち退き命令に基づき、軍と警察の混成部隊により不法占拠者の排除が行われました」[8]。治安対策のために、日本人会は「地域振興協会」にかかわっているのであるが、これについてはＢ氏らの箇所で詳述したい。

水道については、以前は地下水であったが、日本人会の運営により 1992 年から一部市街地において上水道が利用可能となった（現在 260 軒が利用）。下水道はなく、浄化槽にためて自然浸透で流すのみである（ちなみに、電気、プロパンガスは民営。電気は 1970 年ごろに導入された。固定電話はなかなか普及せず、携帯電話が多い）。

イグアス日本語学校は、入植開始から２年後の 1963 年、30 名の生徒から始まった。現在小学部６年（週３回半日）・中学部３年（週２回半日）の授業で、生徒数は 111 名（図表５）。以前は 200 名近くいたこともある。非日系人対象の「ラパーチョコース」（週３回半日）も併設されている。生徒の 40% ほどが非日系 = パラグアイの現地人である。高等部は以前は独立していたが 2004 年度からは統合され毎週土曜日に日本語上級を勉強している。教員は７名＋見習い教員１名で、天理教から派遣されたボランティア教員もいる。小学部の生徒は、日本語能力試験にうからないと中学部へ進めない。また、毎年スピーチコンテストもおこなっており、2011 年はＢ氏の娘が代表で参加予定である。なおＢ家はじめ多くの家庭では日本語とスペイン語混合で会話がなされている。

このように、イグアス移住地では日本語教育に力をいれており、それはＤ氏が後述するように、アイデンティティ形成の要因とされている（その一環として毎朝日の丸も掲揚している）。２世、３世になっても日本語教育と普及を重視しようという点は、現地化がすすむブラジル日系社会とは異なっており興味深い[9]。ただ、図表５にあるように日本語を使用していない家庭における児童数は増加しており、Ｄ氏の考えはその危機感の表われであるともいえる。

アイデンティティといえば、イグアス移住地で人目を引くのが日本のシンボルとして公園に建てられた大鳥居である。この公園が市街地の中央にあり、隣接して農協、銀行（近年できた）、その他の施設が整っている。農協併設のスーパーでは日本の食糧品なども買うことができる。

写真２　大鳥居と EXPO ののぼり

なお日系人は、児童期は日本国籍にくわえてパラグアイの国籍も保持している。

【EXPO】

イグアス移住地では毎年８月に、市役所・日本人会・農協の共催でEXPOと称する商品見本市を公園で開催している。ブースは60-70店舗ほどで地元の企業や農機具会社のほか日本人会のブースも出店する。後述するＢ氏の経営する農薬関連会社もブースをだしている。夕方から夜間にかけては出し物（地元のセミプロなどによる演芸やアルパ演奏、子どもたちの踊り（パラグアイのボトルダンスや日本のソーラン節、花笠音頭、よさこいソーランなど））がおこなわれ、一つの祭りとなっている。2011年は50周年記念ということもあって例年よりも豪華であった。このEXPOは、14年前に、B、D、F氏ら若者が中心となって地域活性化のために開始したものである。ピラポ移住地でも同様のEXPOをおこなっているが、5年おきの開催であり毎年おこなうのはイグアス移住地のみである。

【葬儀】

パラグアイの国教はキリスト教（カトリック）であるため、今回の50周年記念式典でも、法要はまずはじめにカトリックの方式でおこなわれた。その後、日本人僧侶７名ほどによる仏式の法要がおこなわれた。１世の多くは仏教・神道、２世以降はキリスト教が多い。

滞在中に美隆地区長の母堂（1922年生まれ。72年、50歳の時に富山から来パ）が死去された。筆者は仏式の葬儀に参列したので、その状況を簡単に描写したい。日本と同じく通夜と告別式があり、「忌中」の表示がはられる。通夜は皆平服での参加であり、夜に自宅でおこなわれた。5ｍ×2.5ｍくらいの黒白の幕がはられ、中心に「○○之墓」と書いた柱が建てられる。横には花輪が6つ並べられた。送り主指名はローマ字書きである。そのほか、祭壇には位牌（「故○○之霊」とある）と故人の写真、線香たて、果物、漬物、花（菊と蘭）

写真３　埋葬の様子

が飾られる。祭壇前には参列者用300人分ほどの椅子が並べられ、親族は前列に礼服を着て座っている。参列者は、係の人から火のついた線香を１本もらい、それを読経の最中に線香立てに立てていく。その際、線香代の入った袋を前に置いていく者もいる。終了後、簡単な食事がふるまわれる。

告別式は日本人会サロンで翌日の午前中に行われる。このときは参列者は皆礼服を着ている。告別式では読経のあと、日本人会会長のＤ氏と老人会の関係者が弔辞を読んだ。昨日の通夜以上の人が集まった。日本人だけでなくパラグアイ人も集まっていた。その後は出棺、移住地内にある共同墓地での埋葬となる。墓地への移送は普通のライトバンであった。パラグアイでは個人墓であり、家の墓というものはない（家ごとの墓地区画はあるが、１家族の区画で３人くらいしか埋葬できない）。それゆえ、墓地の場所不足が心配されている（なおＢ氏も父とは別に墓をつくると考えられる）。

パラグアイは土葬である。墓地の入り口でも受け付けがあり、Ｂ氏ら２名が受付係となり座っている。墓でも僧侶が読経をして、その後親族、参列者が土を盛っていく。参列者全員が一通り盛ったら、現地人が残り埋葬作業をおこなう。30分くらいで終了し、盛り土の上には花輪の花や果物などが供えられる。

【農業とイグアス農協】

イグアス移住地では近年自営業や会社勤務、日本への出稼ぎをする人も増えているが、主流は農業であり、多くが大豆生産に従事している。農業の平均的な経営面積は200haほどといわれる。近年の所有面積、戸数、比率は図表６のとおりである。50ha以下を小農とするなら、45%ほどが小農になるが、51ha以上400ha以下では40%ほどを占める。

図表６　日本人会会員が所有する土地面積の状況

所有面積(ha)	戸数	比率(%)
50以下	84	44.4
51-100	29	15.3
101-200	27	14.3
201-300	22	11.6
301-400	14	7.4
401-500	3	1.6
501-600	2	1.1
601-700	2	1.1
701-800	3	1.6
801-900	1	0.5
901-1000	0	0.0
1001-1500	2	1.1
合計	189	100.0

注：近年の土地利用状況報告書をもとに作成。
資料：澤村編（2011）

さて、イグアス移住地の農業は1961年に設立されたイグアス農協の歩みと軌を一にしている[10)]。入植当時日本人はトマトやホウレンソウなどさまざまな野菜種を持参し栽培を試みた。移住地の土地は豊かであったため良質の物が生産でき、1970年代まではトマト栽培を中心としてきた。しかし、パラグアイの人口では国内での野菜販売では限界があった。そこで、農協は大豆作への転換を試み、生産物貯蔵に必要なサイロ建設（7300トン）を1979年におこなった。しかし、天候不順でサイロの利用がすすまず、組合員も多額の投資が必要

写真４　イグアス農協のサイロ

になるなどして償還の計画が狂い、農協は多大の負債をかかえて倒産の危機にいたってしまう。

農協の危機は移住地の破滅にもつながりかねないものであったため、日本の政府機関（大使館、JICA）および農協の指導と援助により、機械化と大豆の不耕起栽培へ向けて進路をかえ、経営の建て直しをはかることになる。なお、こういう苦境を経験しているためか、１世には借金に対して反感を示す人が多いようである（後述するＡ氏もそうである）。

大豆の不耕起栽培は、土壌保全を目的に1982年に導入されて、それ以降大豆栽培が飛躍的に成長した。現在、移住地での大豆栽培はほとんど不耕起の直播である。イグアスからパラグアイ全土に広まっておりイグアスが不耕起栽培発祥の地とされるようになった。この成功によって農家経営および農協経営は好転し、1998年には小麦の製粉工場の建設もおこない、さらに近い将来にサイロと製粉工場の増設を検討している（現在の製粉の性能は40トン/日。これを80トン/日に変えていく予定）。

現在サイロは20基ほどで合計４万3800トン（種子用サイロは3300トン）。運ばれた農産物（主に大豆・小麦）は選別ののち乾燥機で乾燥され、サイロに保管される。大豆はアメリカのカーギル社へ販売している。2011年は訪問時点で４万7000トンを販売していた。1000トン単位での販売であり、価格は常に変動するので、シカゴ市況をにらみながらの販売である（ラ・パス農協やピラポ農協は他の穀物メジャーへ販売している）。日本

へ向けては、10年ほど前からギアリンクスという日本企業を仲介して輸出している（非遺伝子組み換えで約3000トン）。なお、東日本大震災後に、イグアス日本人会およびイグアス農協の尽力でパラグアイ産大豆の豆腐100万丁が被災地に届けられている。

ちなみに、近年干ばつが続き大豆の収量が落ちているが、生産者に聞くと平年の50%の収量であればなんとか経営を維持できるという（2011年の収量は約3トン/ha。悪い年は1.7トン/haだった）。また、雑草の種子が混ざった大豆や割れてしまった大豆は熱処理して畜産飼料にする。販売価格は400Gs/kg（＝約10円）で、後述するB氏は2010年に140トンほど購入している。

その他、イグアス移住地では大豆以外に、畜産も盛んである。畜産については後の具体例のなかで述べる。

現在の組合員数は93名。理事は6人。職員は、製粉工場なども合わせて60名ほどである。パートではなく、月給、週給、15日給などの給与で雇用されている。なお、イグアス農協には、JICAの研修生から転職した日本人女性職員がいる。彼女は1996年から3年間、故久保田洋史組合長時代に研修に来パし、「久保田氏に影響を受け、一緒に仕事をしたいと思って」イグアスに移住した人物である。この久保田組合長とは、製粉加工の方向へと農協を導き、後述するD氏らにも影響を与えた人物である。現在の組合長はE氏という38歳の若い男性である。E氏は、複合経営をイグアス農協の方向性として模索しており、久保田組合長のような積極志向と対比すると堅実志向とみなされている。

日本同様、農協青年部がある。以前（B氏がかかわっていたころ）は、青年部で畑を持ち、その収入で月1回は集まってアサード（焼き肉のパーティー）をしていた。しかし、現在の活動は活発ではなく、畑管理の研修会と年末の花火大会くらいの活動しかしていない。

そのほかイグアス農協で特筆しておくべきことの一つに、1995年7月に「イグアス地域振興協会」を設立したことがある。この点についても後の人物紹介のなかで詳述していくが、簡潔にいえば、より積極的に地域の問題に取り組むため、「非組合員の小農家にも廉価で農業資材を販売しながら、その利益や寄付金などを元に、地域振興に必要と思われる諸活動に財政支援をおこなって」いく活動のための組織である[11)]。

【現在の課題と今後の目標】

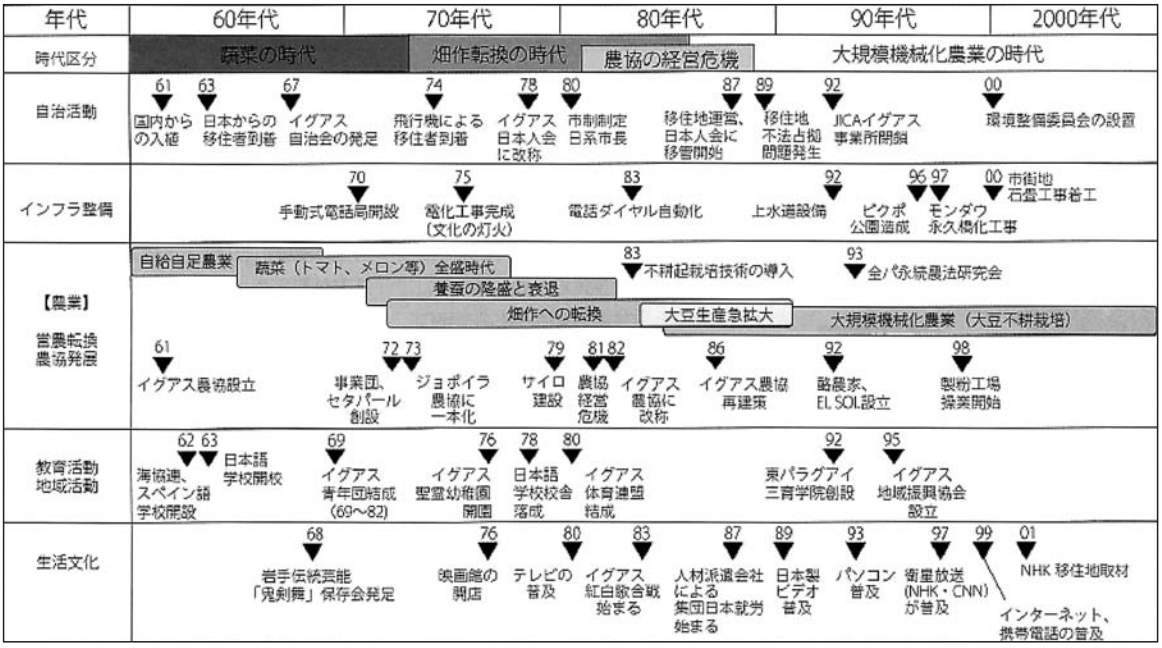
イグアス移住地における現在の課題および今後の目標としては、次のようなものがあげられる。(1) 高齢者福祉対策。そのために基金を約3億Gsほど積みたてている。(2)植林による環境保全。パラグアイ政府は現在、環境保全と熱帯林再生のための植林を義務付けている。それに呼応するため、日本人会とイグアス農協が協力して、2006年12月に自然保護委員会を設置し、植林活動を開始した。2007年には日本経団連の自然保護基金の助成をうけて、苗木生産の育苗センターを設置した。その後、オイスカや三井環境基金の助成をもとに、イグアス湖のほとりを10年かけて原生林に戻すプロジェクトを開始した。「日本人会は環境保護も指針にし、三井物産環境基金より助成を受けて実施するイグアス・ダム周辺の1440ヘクタールに植林する計画を進め、ヘクタール当り1200本、毎年15万本を植えている」[12)]。(3) 地域振興開発。上述の地域振興協会のことである。くわえて、後述する「パラグアイ南東部小規模農協強化計画」も含めることができよう。

図表7にイグアス移住地の経緯を図式化したものを転載しておく。

【付記】

今回のイグアス訪問にあたっては伊藤勇雄顕彰会（藤元修会長）にお世話になった。また、途中まで伊藤東雄氏（勇雄次男：盛岡市在住）にご同行いただいた。現地では、伊藤鷹雄、伊藤玄一郎、福井一朗、伊藤勉の各氏に、現地調査・宿泊・交通等についての便宜をはかっていただいた。くわえて、千田廣暁・照子夫妻（ブラジル岩手県人会

図表７　イグアス移住地の経緯



資料：パラグアイ日本人会連合会（パラグアイ日本人移住 70 年誌編纂委員会）編（2007：23）

会長）には現地で行動をともにさせていただき、帰途サンパウロでは県人会の視察に便宜をはかっていただいた。その他日系移住地の多くの方にお世話になっている。記して感謝申し上げたい。

【注】

1）国際協力機構（JICA）の HP より（http://www.jica.go.jp/topics/2010/20100401_03.html）。元データは Encuesta Permanente de Hogares2008。

2）「パラグアイ農業の概要（2010 年 7 月）」（http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/pdf/paraguay_gaiyo.pdf）。引用データは 2008 年のパラグアイ共和国農牧省センサス暫定値。

3）このあたりの記述は、パラグアイ日本人会連合会（パラグアイ日本人移住 70 年誌編纂委員会）編（2007）による。

4）このあたりの記述は、聞き取りのほか、澤村編（2011）による。

5）パラグアイ日本人会連合会の HP より（http://rengoukai.org.py/ja/la-sociedad-nikkei/idonde-estamos/colonia-yguazu）。

6）『ニッケイ新聞』2011 年 9 月 14 日。この新聞はブラジル・サンパウロに本社を置く日本語新聞である。

7）本稿で原住民、現地人というときは、グアラニー人をさす。

8）5）と同じ。

9）国本は、ボリビアとパラグアイの移住地について「ほぼ半世紀を経ようとしている現在でも、祖国日本と強い絆を保ち、日本における農村社会の延長のような形で存在している。そこで生まれ育った二世の中には、自国［＝ボリビアやパラグアイのこと：三須田注］への帰属を否定し日本人意識を保持するものも少なくない」（国本 2002：88）と指摘している。

10）パラグアイには他に 5 つの日系人農協がある（アスンセーナ園芸協同組合、ラ・コルメナ農協、アマンバイ農協、ラパス農協、ピラポ農協）。これらは日系農協中央会を組織している。

11）「イグアス農協の概況」（http://reocities.com/Tokyo/temple/8632/coop.html）。

12）6）と同じ。

【文献】

相田洋，2003，『航跡　移住 31 年目の乗船名簿』日本放送出版協会.

大久保好唯，1984，『開拓の詩人伊藤勇雄の世界』女性仏教社.

————，1995，『夢なくして何の人生ぞ――伊藤勇雄の生涯――』地方公論社.

国本伊代，2002，「ボリビアとパラグアイにおける日本移民とメノナイト――“拒否された”外国人集団の受入れ

と定住の経緯を通してみた多民族社会の姿――」柳田利夫編『ラテンアメリカの日系人 国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版会.
澤村壱番編，2011,『イグアス日本人会 2011 年概況 イグアス入植 50 周年記念』イグアス日本人会.
パラグアイ日本人会連合会（パラグアイ日本人移住 70 年誌編纂委員会）編，2007,『パラグアイ日本人移住 70 年誌「新たな日系社会の創造」』パラグアイ日本人会連合会（パラグアイ日本人移住 70 周年記念祭典委員会）.
細谷昂，2002,『ブラジル日本移民の生活と意識――努力、工夫、そして夢とアイデア――　ワーキング・ペーパー・シリーズ No.11』岩手県立大学総合政策学会.
三須田善暢，2011,「書評 大久保好唯著『移住――人生最後の夢をジャングルの開拓に賭けた男――伊藤勇雄』（桐々社：2008 年）」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』13，岩手県立大学盛岡短期大学部：113-4.